

## 学部における心理学専門教育の 導入に関する一研究

芳賀康朗・川島一晃<sup>1)</sup>

〈要旨〉平成26年度に本学コミュニケーション学科の学部教育に心理学の専門教育カリキュラムが導入された。本研究ではそのカリキュラムの特徴を解説するとともに、受講生の心理学に対するイメージや授業内容についての感想を調べた調査結果を報告し、受講生の学習支援を目的としてスタートさせた正課外活動についても紹介する。

導入されたカリキュラムは公益社団法人日本心理学会が認定する認定心理士の資格取得要件を満たす科目群から構成された標準的なものである。実際に授業を受講した1年次生の約半数からは心理学に対するイメージが大きく変化したとの感想が寄せられた。また、心理学が生物学や脳科学などの自然科学と密接な関係をもつことに対する驚きの声も数多くあった。しかし、「授業内容が難しかった」、「数式や計算が出てきて戸惑った」、「臨床心理学の内容を期待していたが、違う内容だった」との失望も散見された。

このような心理学の学習に対する失望を解消し、授業内容の理解を促進させることを目的として、実験やロールプレイなどを取り入れた実習形式の正課外活動を平成27年度から開始した。この活動を継続し学生主体の学びの場に移行させていくことで、卒業研究につながる専門知識と研究技法を身につけるだけでなく、学年間の連携を強化し、学科や演習への帰属意識を高めることが期待される。

〈キーワード〉心理学カリキュラム，学部教育，正課外活動

## はじめに

皇學館大学文学部コミュニケーション学科では、平成26年度から専門教育の一分野に心理学のカリキュラムを導入した。カリキュラムは講義科目16科目、実験実習科目2科目、3・4年次生向けの専門演習2科目から構成されており、学科専任教員2名を中心として、他学部専任教員と非常勤講師が担当している。

心理専門職である臨床心理士がスクールカウンセラーとして多くの学校に配置されてきたこと、心理学や脳科学に関するテレビ番組が頻繁に放映されていること、そして心理学が大学生の抱える悩みや不安と直結する学問であることなどがきっかけとなり、数多くの学生が心理学の授業を受講しているものと考えられる。入学後はじめて受講する専門科目である「心理学概論Ⅰ」の受講者数は、平成26年度が100名、平成27年度は139名あった（いずれも1年次生のみ）。しかしながら、受講生が心理学に対して抱えているイメージや期待と専門教育カリキュラムにおいて展開される“学問としての”心理学の教育内容との間に大きな乖離があることも事実である。授業後に実施された授業アンケートでは、「期待していたのとは違う内容だった」、「メンタリズムの話だと思っていたが全く違った」、「高校の生物のような授業だった」、「数式がでてきて困った」といった回答が数多く見受けられる。

日本学術会議心理学・教育学委員会心理学分野の参照基準検討分科会（2014）が指摘しているとおり、根拠のない信念や論理的誤謬が含まれる常識的な心の理解を超えて、科学的に正しい心の理解を目指すのが心理学のあるべき姿であり、そのために不可欠なデータ分析能力や実験的検証方法を習得することが学部教育に要求されている。しかし心理学は誰もが遭遇する日常的事象を扱う学問であり、先入観や偏見といった非科学的認識が入り込む隙が大きい。また日常的事象を扱う学問であるにもかかわらず、初等・中等教育においては科学的心理学の教育がほとんどなされていない。こうした背景的要因が心理学に対する誤解を拡大させる原因となっているのかもしれない。

学部における心理学専門教育の導入に関する一研究（芳賀・川島）

本稿では、コミュニケーション学科での心理学専門教育の充実と学生の学習意欲の向上に資することを目的とし、授業カリキュラムの特徴や正課外での独自の取り組み事例を紹介するとともに、平成26年度から平成27年度春学期終了時点まで行ってきた受講生に対するアンケート調査や聞き取り調査の結果を報告する。

## 1. コミュニケーション学科における心理学カリキュラムの特徴と課題

コミュニケーション学科は、「人間関係」と「英語コミュニケーション」という2分野の教育を通じて実践的なコミュニケーション能力を習得し、その背景となる知識や理論、歴史や伝統、文化の教育と研究によって地域社会の多彩なコミュニケーションの場を担い、すぐれた人材を育成することを教育目的としている。心理学の専門教育カリキュラムは人間関係コースの一分野として組み入れられ、異文化間コミュニケーション、情報発信スキル、地域貢献などの科目と併置されている。さらに、学生のキャリアパスを広げるために、公益社団法人日本心理学会が認定する「認定心理士」の資格取得要件を満たす講義と実習科目から構成されている。

認定心理士とは、心理学に関する標準的な基礎知識と基礎技術を大学で修得したことを日本心理学会が認定する民間資格であり、平成26年3月現在で43,000名がこの資格を取得している。資格取得にあたっては、学会が示している単位認定基準をクリアした内容の基礎科目と選択科目をあわせて36単位以上取得することが条件となり、基本的には卒業後に学会に申請することで取得できる。この資格は、心理専門職に就くために必要となる専門的な知識と技能を有していることを担保する職能資格ではない。しかし、学部名、学科名、専攻名に心理学という学問名称が冠されていない本学科の場合、学生自身が大学で学んだ学問分野を対外的にアピールするためのIDカードとしての役割が期待される。

表1には、日本心理学会（2014）が「日本心理学会認定心理士資格申請の手引き2014年度改訂版」に示した標準的な資格申請科目群と本学科で開講されて

#### 学部における心理学専門教育の導入に関する一研究（芳賀・川島）

いる科目との対応をまとめた。本学科のカリキュラムは作成時点から認定心理士資格取得を目標としていたため、学会が例示した名称にほぼ一致する科目名称となっている。しかし科目数は必要最小限（卒業論文を除き、18科目36単位）にとどまり、近年発展の著しい脳神経科学関連の科目などは皆無である。また教職に就くことを希望する学生が多いことを考慮すると、青年心理学や児童心理学などの科目を充実させる必要があるといえる。さらには、日本初の心理学関連の国家資格として平成27年9月に参議院本会議で通過・成立した「公認心理師」などの新しい職能資格の取得にいかに対応していくかについても検討していかなくてはならない。

これらの課題に加え、これら心理学専門科目と他の学科専門科目との関係性をカリキュラム・ポリシーのもとに学生にいかに関知させるか、心理専門職や教職以外の進路を考えている学生に対して心理学専門科目の履修意義をいかにアピールするか、そして心理専門職に就くために他大学の大学院進学を目指す学生に対していかなる指導を行っていくかなど、検討すべき問題は山積している。また近年多様化の著しい大学入学前の学習歴の個人差に対応した導入的学習の機会を提供することも必要になってくると考えられる。

## 2. 1年次生が抱いている心理学に対するイメージ

ここでは大学1年次生が授業受講前に抱いている心理学に対するイメージや授業内容への希望、および受講後のイメージの変化を分析するために行った質問紙調査の結果を報告する。調査を実施した科目は、コミュニケーション学科の学生はもちろん、他学部・他学科の学生に対しても開講されている「心理学概論Ⅰ」である。

この授業の教科書には、有斐閣から出版されている『はじめて出会う心理学改訂版』（長谷川・東條・大島・丹野・廣中、2008）を採用した。表2には平成26年度と平成27年度の「心理学概論Ⅰ」と「心理学概論Ⅱ」の授業シラバスの概要を示した。教科書の内容全般を1年間で網羅することを前提として、春学期の「心理学概論Ⅰ」には研究法、研究史、そして基礎心理学に関する内容を、秋学期の「心理学概論Ⅱ」には臨床、教育、発達などの主に応用心理学に

学部における心理学専門教育の導入に関する一研究（芳賀・川島）

関する内容を配置した。

### 1) 調査対象者

授業前調査は、平成26年度春学期および平成27年度春学期に開講された「心理学概論Ⅰ」の初回授業に出席した1年次生213名（平成26年度91名、平成27年度122名）に対して実施した。学部・学科の内訳は、文学部コミュニケーション学科の学生が108名、文学部のコミュニケーション学科以外の学生が94名、文学部以外の学生が11名であった。

授業後調査は、平成27年度春学期開講の「心理学概論Ⅰ」の最終授業に出席した1年次生122名に対して実施した。内訳は、文学部コミュニケーション学科の学生が55名、文学部のコミュニケーション学科以外の学生が61名、文学部以外の学生が6名であった。

### 2) 調査方法と質問内容

調査対象者に質問紙（A4用紙一枚）を配布し、調査目的を説明した上で約15分間回答時間をとった。回答に際して、答えたくない質問に対しては答える義務はないこと、回答結果の匿名性は守られること、調査目的以外に回答結果が使用されることはないことも説明した。

授業前調査の質問項目は、「①この授業で何を学びたいか（自由記述）」、「②授業前にシラバスをどの程度読んできたか（3件法）」、「③秋学期に開講される「心理学概論Ⅱ」を受講する意志（4件法）」、「④「心理学」という言葉から連想するイメージ（自由記述）」、「⑤認定心理士資格の取得意志（コミュニケーション学科の学生のみ対象、4件法）」の5項目であった。

授業後調査の質問項目は、「①授業で取り上げたテーマのうち興味・関心をもったテーマ（8項目から2項目まで複数選択可）」、「②興味・関心をもった具体的な内容（自由記述）」、「③受講前と比較して心理学に対するイメージは変化したか（4件法）」、「④受講後の感想（自由記述）」の4項目であった。

### 3) 結果と考察

2年間実施した授業前調査から、本稿では「①この授業で何を学びたいか」と「④「心理学」という言葉から連想するイメージ」の2項目についての回答を中心に分析し、その結果を報告する。いずれの質問の回答についてもKJ法（川喜田, 1967）を参考にして分類作業を行った。

表3には、「①この授業で何を学びたいか」の回答の分類結果を示した。まず目につくことは、子どもと接するときに必要な知識や教員採用試験に役立つことを学びたいといった教職に就くという希望に直結した回答である。その一方で、臨床心理士をはじめとした心理学の専門職に就くことを意識した回答は少なかった。こうした背景には、そもそも本学には学校教員になることを目標として入学する学生が多いこと、専門カリキュラムがスタートしたばかりで心理学のキャリアパスについての情報が周知されていないことなどが関係していると考えられる。さらに、平成27年度現在三重県内には臨床心理士養成大学院（日本臨床心理士資格認定協会指定大学院第1種、第2種、専門職大学院）を併設した4年制大学は皆無であり、臨床心理士を目指す高校生の進路先として本学科が認識されていない可能性も考えられる。

「具体的関心・学問的関心」に分類された回答には、マスメディアで頻繁に登場するキーワード（しぐさ、潜在的心理、無意識、犯罪心理、コールドリーディングなど）が数多く見受けられた。マスメディアの情報によって心理学に対するイメージが形成・誘導される可能性は、「俗信・テレビ・占いなど」のカテゴリに分類された回答をみても容易に推測される。また、いわゆる神経発達障害（自閉性スペクトラム障害やADHD：注意欠如・多動性障害）も散見された。しかし回答のほとんどはシラバスに示された授業内容（表2）と直結したものではなく、教科書に登場する専門用語とも限らない。このことから、心理学に対する学問的関心が必ずしも高くないこと、受講前にシラバスや教科書に目を通してしている学生が少ないことが示唆される。このことは、今回の調査の「②授業前にシラバスをどの程度読んできたか」という質問に対して「全く読んでいない」と回答した学生が全体の43.2%を占めていたことから裏付けられる。

「人間理解に役立つこと」に分類された回答は、他者を理解し良好な人間関

係を構築することに関わる回答と自分自身を理解し自己実現を願う回答の2種類に大別された。「他者の気持ちをくみとる方法を身につけたい」、「人間関係をうまくやっていくコツをつかみたい」といった回答には、回答者自身の友人関係、家族関係、恋愛関係における悩みが反映されているのかもしれない。また「自分の心が知りたい」、「自分自身のことをわかりたい」といった回答には、自分自身の欠点や悩みを解決し、人間的な成長を遂げたいという願望が現れているのかもしれない。いずれの回答も、自己指向的な興味関心に基づくものであり、現状の問題点を解消したいという願望が強く感じられる。

本学コミュニケーション学科では、アドミッション・ポリシーのひとつに「コミュニケーションや人間関係に深く関心を持ち、将来社会に貢献したいという意欲を有している。」ことを謳っている。しかし今回の調査結果は、「将来社会に貢献したい」といった時間的にも社会的にも“広い”視点からではなく、「私が今ここで抱えている悩みや疑問を解消したい」という“狭い”視点からの動機に基づいて心理学を学びたいと考えている傾向があることをうかがわせる。

表4には、「④「心理学」という言葉から連想するイメージ」の回答の分類結果を示した。「抽象的関心」に分類された「うさんくさい」や「非科学的」、「他者の心」に分類された「読心術」や「マインド・コントロール」、「テレビ・俗信・宗教など」に分類された「催眠術」、「占い」、「メンタリズム」といった回答にみられるように、心理学の実証科学としての特徴が正しく認識されておらず、むしろ負の先入観を抱いていることが推察される。

「具体的関心・学問的関心」に分類された回答の中には、「錯視」や「だまし絵」といったテレビ番組で取り上げられることの多いキーワードが見受けられた。錯視やだまし絵は古典的な知覚心理学的テーマであるが、最近のテレビ番組では、「脳がだまされる」といった表現に端的に示されるように、脳科学の枠組みの中で紹介されることが多い。心理学の授業を受講してはじめて、これらの現象が心理学の研究テーマであることを知った学生も多かったのではないだろうか。

「職業・仕事」に分類された回答で目につくものは、「心理カウンセラー」、

「臨床心理士」、「心のケア」、「悩んでいる人の話をきく」といった臨床心理学に関する回答である。虐待、いじめ、不登校、自殺、被災者支援、ハラスメントといった現代社会における諸問題が深刻化するにつれて、臨床心理士に代表される心理専門職が注目を集める機会も増えている。また大学入学直後の大学生にとって最も身近な心理専門職といえば、高等学校に配属されていたスクールカウンセラーであろう。「心理学イコール臨床心理学」という認識をもった大学入学生は少なくなく、後述するように「心理学概論Ⅰ」の授業で臨床心理学に触れなかったことに失望を感じた学生もいたようである。

「職業・仕事」のカテゴリには、「精神安定剤や睡眠薬を処方する」、「病院の精神科」、「学校の相談医」といった回答が見受けられる。これらの回答からは、臨床心理学の専門家の仕事と精神科医の仕事が混同されている可能性があることが示唆される。また、「心理捜査官」や「プロファイリング」といった犯罪心理学や犯罪捜査に関連するキーワードもいくつか見られた。これらは「犯罪心理捜査官」、「プロファイラー」、「メンタリスト」、「精神行動分析学者」といった実在または架空の職名がテレビドラマや海外ドラマで頻りに登場すること影響が大きいものと思われる。

次に、平成27年度のみ実施した授業後調査の結果から、本稿では「③受講前と比較して心理学に対するイメージは変化したか」、「④受講後の感想」の2項目についての回答内容を分析し報告する。

「③受講前と比較して心理学に対するイメージは変化したか」との質問に対する回答を分析した結果、「授業前と全く変わらなかった」との回答は全体の13.1%、「授業前から少し変化した」との回答は37.7%、「授業前からかなり変化した」との回答は47.5%、「授業前からすっかり変化した」との回答は2.5%であった。

表5には「④受講後の感想」の回答の分類結果を示した。この結果からも、受講前に抱いていた心理学に対するイメージが授業後に大きく変化したことがうかがえる。シラバスおよび第1回の授業では、臨床心理学の内容は「心理学概論Ⅱ」で取り上げることを伝えたが、「失望・落胆」のカテゴリに示したように「臨床心理学の内容を期待していたがそれとは違う心理学だった」や「自



分がイメージしていた心理学（臨床心理学）とは違った内容だった」という回答がいくつか見られた。これは、受講生が授業前の説明を十分理解していなかったか、理解はしていたがそれでも臨床心理学に対する期待が大きかったのかのいずれかに起因するものと考えられる。

「失望・落胆」と「予想外・驚き」のいずれのカテゴリにも、生物学、脳科学、数学、統計学といった、いわゆる理科系の内容が登場することに対する驚きを感じられる回答が数多く見受けられた。表2に示したように、生物学や脳科学に関連する内容は第3回の「脳と心（中枢神経系の構造、心身相関）」、第4回の「感覚・知覚（感覚器の構造）」、第14回の「脳損傷と心のはたらき（失認、健忘、失語）」で取り上げた。また、数学や統計学に関する内容は第1回の「心理学の研究対象と研究方法」と第5回の「感覚・知覚（感覚の限界）」で取り上げた。

中枢神経系の構造についての解説は高校生物レベルの内容にとどめ、脳の3D画像や動画資料を使いながら行った。しかし、高校で「生物」または「生物基礎」といった科目を履修していない（履修したかどうか定かでない）受講生が約6割以上を占めており、「数学や理科の内容ばかりだった」といった不満をもった受講生もいたようである。その一方で、「高校で習った生物の内容が出てきて面食らった」や「高校の生物で出てきた脳や眼球の仕組みまで触れるとは驚きだった」といった回答も寄せられた。これらの回答が好意的な感想なのか否かは特定できないが、高校在学時に学んだ内容と大学での授業内容を結びつけることができたことの意義は大きいといえるだろう。

「文系の学問だと思っていたのに、数式や計算が出てきて戸惑った」という回答が見られたが、この回答の「数式や計算」とは感覚・知覚のテーマで扱ったウェーバーの法則とウェーバー・フェヒナーの法則のことを指すと推察される。このふたつ法則は刺激量と感覚量との関係を表現する数式であり、弁別閾と原刺激量の比が一定に保たれること、感覚量が刺激量の対数に比例することを表現している。授業では、分数を使って「比が一定」ということの意味を説明したり、常用対数を用いて感覚量と刺激量の関係を図示したりして説明を試みた。しかし、分数と比率を関連づけて理解できなかつたり、高校で対数関数

学部における心理学専門教育の導入に関する一研究（芳賀・川島）

や指数関数を学習する「数学Ⅱ」を履修していない受講生も数多くいたことから、そうした受講生は授業内容に嫌悪や失望を感じたのかもしれない。

### 3. 心理学研究部会の設置とその目的

これまで述べてきたコミュニケーション学科における心理学カリキュラムの展開にともない、皇學館大学文学部コミュニケーション学会内に今年度心理学研究部会を新設した。本節では、この心理学研究部会の内容とその目的を概観する。表6に心理学研究部会の狙いとする3つの目的を示した。また表7に平成27年度（春学期）における心理学研究部会の開催実績と今後の活動予定を示した。

第一の目的として「①心理学を学ぶ学生の学びの深化」が挙げられる。研究部会の初回オリエンテーションに参加した学生に対し、研究部会に期待する点をヒアリングした際にも、「授業における学びの復習」や「新たな心理学的知見」を期待する声が多く聞かれた。また（臨床心理士資格の取得などを目的として）大学院進学を想定している学生も散見され、研究部会を活用した心理学的知識の蓄積が一つの大きなニーズとして考えられる。学生自ら学ぶ対象に関心を向けて学ぼうとする姿勢は、心理学では内発的動機づけと呼ばれ、望ましいモチベーションの形とされている。学生のこのような期待に答えていくことは、コミュニケーション学科における心理学教育の充実に寄与すると考えられよう。

第二に「②学び得た心理学的知見の日常への応用・実践の機会」が挙げられる。通常の講義では大人数の受講生に対し、紹介した知見を実際的に応用したり、心理学的技法の体感を狙った演習などを十分に提供することがしばしば困難となる。しかし、多くの心理学の知見は、日常の中で散見される現象を扱っており、その学びを日常へとつなげて理解していくことは大変興味深い。そこで、心理学研究部会の中で、講義内容などに関連する諸理論・技法の演習を取り上げ、ロールプレイや実験・観察などを実際に体験することで、学び得た知識を日常生活に関連させたり、あるいは実際に援用できる般化を期待したい。特に、学生が関心を強く寄せる臨床心理学領域の様々な技法は、その内容を適

切に理解し用いることで、対人コミュニケーションにおける意思疎通に効果的に働く。学生たちには、その技法の背景に実証的基礎検討や様々な領域における科学的検証（講義内で学ぶ多くの心理学的知識）があつて、はじめて効果的で有効な心理学の応用があるということをぜひ学び取ってもらいたい。

第三に「③（心理学を通じた）学年横断の交流の機会の創出」である。コミュニケーション学科において心理学教育が開始されて間もないこともあり、多くの学生にとって心理学を学ぶ過程は驚きと戸惑いにあふれた体験となっていると想像される。学びはじめの初期段階でのそれは本稿で報告しているような心理学のイメージのギャップとして現れている。また心理学を専門として選び、卒業研究などにおいて心理学的研究法を学ぶ過程では、多くの場合、3年次から研究室における演習において各自の関心に基づきながら学ぶこととなる。しかし、本学の専門演習は学年ごとに構成されていることもあり、学生たちは先輩の研究の進展を傍で学ぶ機会が少ないのが現状である。どの学生でも初めて出会う研究テーマの選定をはじめ、目的の精査や方法論、それに対応した分析方法といった学びに戸惑い、苦悩する。その背景には、自分の取り組んでいる課題の次にどのようなステップが存在し、どのような姿勢でそれらに取り組むことで研究が前進していくのかという具体的なイメージが見えないことで生じる「袋小路に迷い込んでしまった」ような閉塞感や孤独、不安が挙げられよう。これらは研究を進める上で、ある程度は重要な体験であるが、課題を打破し、前に進むためには、少し手前に行く先輩の後ろ姿というロールモデルが歩み行く後進にとっては学びの道を導いてくれる手がかりとなる。また先を行く先輩にとっても後ろを歩む後輩の姿は時に自戒や気概という良質なプレッシャーとして機能し、後輩に自身が学び得たことを教え伝えることでその学習内容はさらに深化する。これらの相互支援は今日「ピアサポート」という呼称で全国の大学で展開し、活動を通じた学生の学びや成長について関心が寄せられている（泉谷・山田, 2013）。先述した学習支援として展開している例としては、名古屋工業大学にて「先輩のいる学習室」の標語で学生の自習を先輩院生がチューティングする事例が挙げられる（鈴木・川島・後藤, 2014）。また広島大学や名古屋大学では、学生の学生による悩み相談といった心理臨床的な取り

学部における心理学専門教育の導入に関する一研究（芳賀・川島）

組みがなされ、北海道大学や三重大学においては、学生の主体性の発露として学内イベントを企画運営するような自律的成長の取り組みとして展開している例もある（松田・鎗水, 2014；三重大学ピアサポーター学生委員会, 2015）。本稿で期待している学生の相互の交流は、まず学習場面でのタテのつながりが形成される中で、先輩・後輩間の相互学習支援という意味合いが強い。そしてそれに付随する形で、学生たちの関心に基づいた自由課題研究のような自律的な取り組みが生起することを今後期待したい。

#### 4. 正課外における学生の心理学的な学びと課題

学生たちが集い、一定の安全な関係性が構築された空間において交流することで、新たな自己の側面や可能性が発見されることがしばしば観察される。平成19年度から取り組まれた文部科学省による学生支援GPの実践の中で筆者が関与した課外活動プロジェクトにおいても、多様な学生が参加するグループ活動の中では、日常的な雑談や交流を通じて、参加学生に成長や肯定的変化が認められた（川島・桂田・由良, 2010）。本節では、筆者を含む小グループでの「雑談」を通じて新たな自分を感じたと報告してくれたある学生の内省を紹介し、正課外活動における学生の学びの可能性を考えてみたい。

「今までは（相手の）見た目や表面的な部分であったり、その人の雰囲気でしたか、相手を知ることができなかったが、今回の機会で先生や仲間のこれまでのいろいろな話をゆっくりと聞くことができました。より相手を知ることができる機会となった。また自分も話を聞いているうちに、普段なら自分から話さないような自分の体験や出来事、自分が伝えたかったことを話したくなり、話すことができました。自分が相手に抱いていた印象とは違う印象を雑談の後に自分が相手に抱いていることに驚いた」

この報告をしてくれた学生は、普段は物静かで、自分の話を積極的に開示することは少ない様子が観察されている。なぜ普段あまりしない自己開示が促進されたのかをヒアリングしたところ、以下のような語りが得られた。

「自分のことを開示することへの不安もあったが、これくらいは大丈夫かな、と思える柔らかな雰囲気が（雑談の中に）あった。皆がそれぞれ自分の過去の体験を話している場なので、自分もこんな（相手の話に関連した）経験があると話したくなった。（雑談の場では）誰かが問いかけた質問に相手が応え、エピソードを話していく。それを聞いていると、自分もその会話の中に参加してみたいという気持ちが生じてきた。（その場にいる皆に）受け止めてもらえそうだと感じると、自分の新しい側面も知ってほしいと思えた。」

一見、たわいもないやりとりであっても、その経験から得られるものは実に様々である（川島, 2012）。今回の雑談では、筆者がすべての参加者が会話に安全に参加できることを保証しようとコーディネーターはしていたものの、いって日常的なやりとりであった。しかし、日常的なやりとりの中で今回の発見が確認できたからこそ、この学生の体験は貴重であるように思われる。大学生が過ごす青年期という時期は、「自分」というアイデンティティーをめぐって、実に様々な揺れ動きを体験する。大学での自分、家での自分、ゼミでの自分、友人の前での自分など、たくさんの顔を使い分けながら生活すると説明する大学生は少なくない。いつもと少し違う「自分」の発見が日常の中で体感を伴って経験されたことで、「新しい自分」はこの学生の日常の姿に少しずつ般化していくだろう。

本稿の調査においても散見された学生の多くが関心を寄せる臨床心理学は、「心理学的知見を援用し、問題解決の専門的支援に貢献することを目的とした学問領域」である。しかし、彼らのすべてが臨床心理士をはじめとする心理的援助の専門職を希望する訳ではない。したがって、コミュニケーション学科で学ぶ臨床心理学の学びの教育的意義を考えた時、「お互いの関係性に臨む姿勢を学ぶ」心理学でもあると言える。

上述した学生の雑談における自己発見は、そこに集った仲間との関係性の中に発露した自己の可能性を捉えたものである。コミュニケーションが標榜される本学科において、学生たちには様々な価値観や個性を持つ個人が他者との関

学部における心理学専門教育の導入に関する一研究（芳賀・川島）

わりの中で生じる様々な現象の機微を、頭と身体から存分に学び取ってほしい。心理学を学ぶ醍醐味は、人間関係の複雑さと深遠さへの絶えなき関心を味わう点にあらう。多様な価値観や期待を抱いて出会う「心理学」という学問が、学生それぞれの人生に寄与するためにも、多層な関係性を体験し、そこで生じる多様な学びをしかと咀嚼することが重要である。その学びをできるだけ安全にコーディネートし、興味深いコンテンツを提供するために、心理学を専門とする専任教員が存在し、また「先輩」がキャンパスに居る意味があるのである。

## 5. まとめと今後の課題

ここまで、約1年半にわたる心理学の専門教育の導入における取り組みについて述べてきた。学科の教育目的に基づいて心理学の専門教育を展開することと、心理学を志向して入学してきた学生の特性（パーソナリティ、学習内容についての希望、卒業後のビジョンなど）に沿った教育を進めることの両立に困難さを覚えながら、試行錯誤を繰り返しているというのが筆者たちの正直な感想である。

最後に、講義や実習、正課外活動、オープンキャンパスでの模擬講義などを通じて実感してきた今後早急に着手または改善すべきふたつの課題について述べる。

一つ目は、大学入学後スムーズに心理学の学びに移行することを促す導入教育の工夫である。心理学は日常的な事象に対して客観的視点から科学的技法を用いてアプローチする学問であるが、扱うテーマの日常性と研究方法の専門性とのギャップに戸惑う学生も数多くいる。心理学に対して失望することなく、積極的な態度で学習を継続させるためには、入学前もしくは入学直後の時期から効果的な導入教育を行うことが必要であらう。例えば、AO入試や推薦入試で早期に入学が決定している学生に対しては、入学前指導の機会を利用して初歩的な実験実習やロールプレイを体験させ、研究の醍醐味を伝える機会を提供することが有効であらう。またオープンキャンパスや模擬授業などの機会に、高等学校での学習や日常における他者とのコミュニケーションが大学での心理

#### 学部における心理学専門教育の導入に関する一研究（芳賀・川島）

学の学びにいかにより有機的に結びついているのかを実感させることもギャップ軽減につながるのではないだろうか。

二つ目は、学生間の情報交換や共同作業の機会を増やし研究テーマや研究方法の共有を促す正課外活動の活発化である。心理学の専門教育がスタートしたばかりで研究上のロールモデル（先輩）を観察する機会がない現状を考えると、これは早急に着手しなければならない課題である。心理学研究部会は現在教員主導で運営されているが、学生自身が「学びあい・おしえあい」を積極的に行うような場に移行させていくことで、先輩の研究や経験に触れる機会が増えることが期待される。先輩の卒業研究に被験者や被検査者として参加したり、その研究の中間報告を研究部会でできくことによって、後輩たちは自分自身の卒業研究を想像することが可能となる。またそうした活動が継続していくことで、学年間の連携が深まり、学科やゼミへの帰属意識も高まっていくのではないだろうか。

#### 引用文献

- 長谷川 寿一・東條正城・大島 尚・丹野 義彦・廣中 直行（2008）. はじめて出会う心理学 改訂版 有斐閣アルマ
- 泉谷道子・山田剛史（2013）. 体系的なピア・サポート活動による学生の学びと成長 大学教育実践ジャーナル 11, 61-67.
- 川喜田二郎（1967）. 発想法 - 創造性開発のために 中央公論社
- 川島一晃（2012）. 学生は体験から何を学ぶのか 大学教育研究 - 三重大学授業研究交流誌 -, 20, 41-50.
- 川島一晃・桂田祐介・由良麻衣子・山脇彩（2010）. 学生支援メッシュプロジェクトにおける各グループ活動の構造とつながり 名古屋大学学生相談総合センター紀要, 10, 19-25.
- 公益社団法人日本心理学会認定心理士資格認定協会（2014）. 日本心理学会認定心理士資格申請の手引き2014年改訂版.

学部における心理学専門教育の導入に関する一研究（芳賀・川島）

松田康子・鎗水孝太（2014）. 北海道大学ピアサポート活動報告書（平成25年度版）.

三重大学ピアサポーター学生委員会（2015）. 三重大学ピアサポート活動報告書.

日本学術会議 心理学・教育学委員会心理学分野の参照基準検討分科会（2014）. 報告 大学教育の分野別質保証のための教育課程編成上の参照基準 心理学分野.

鈴木英一郎・川島一晃・後藤綾文（2014）. 第7回びあのわ報告集.

1) 本研究の英文アブストラクト作成にあたり、クリストファー・メイヨー先生（皇學館大学文学部コミュニケーション学科准教授）より貴重なご助言をいただきました。ここに深く感謝の意を表します。

表1 標準的な認定心理士申請科目とコミュニケーション学科の開講科目との対応

領 域	該当科目名称の例	本学科での開講科目名称
心理学概論	心理学概論 基礎心理学など	心理学概論Ⅰ 心理学概論Ⅱ
心理学研究法	心理学研究法 心理測定法など	心理学研究法Ⅰ 心理学研究法Ⅱ
心理学実験実習	心理学基礎実験 心理学実験実習など	心理学実験実習Ⅰ 心理学実験実習Ⅱ
知覚心理学・学習心理学	知覚心理学 認知心理学 学習心理学など	認知心理学 学習心理学Ⅰ 学習心理学Ⅱ
生理心理学・比較心理学	生理心理学 比較心理学など	比較心理学
教育心理学・発達心理学	教育心理学 発達心理学 児童心理学など	教育心理学 発達心理学Ⅰ 発達心理学Ⅱ
臨床心理学・人格心理学	臨床心理学 人格心理学 健康心理学など	臨床心理学Ⅰ 臨床心理学Ⅱ 人格心理学
社会心理学・産業心理学	社会心理学 対人関係論など	社会心理学 人間関係論
心理学関連科目 卒業論文・卒業研究	卒業論文 卒業研究	卒業論文 (心理学担当教員が指導する場合)

〔資格申請の手引き2014年度改訂版〕(日本心理学会, 2014) を参考にして作成した。



学部における心理学専門教育の導入に関する一研究（芳賀・川島）

表2 「心理学概論Ⅰ」と「心理学概論Ⅱ」の授業内容

科目名	授業テーマ		
心理学概論Ⅰ	第1回	オリエンテーション 心理学の研究対象と研究方法（実験、検査、調査）	
	第2回	心理学の歴史（19世紀末から現代にかけての流れを中心に）	
	第3回	脳と心（中枢神経系の構造、心身相関）	
	第4・5・6回	感覚・知覚（感覚の種類、感覚器の構造、感覚の限界、形の知覚、奥行き知覚、運動知覚、知覚の恒常性）	
	第7・8・9回	学習（馴化と脱馴化、インプリンティング、古典的条件づけ、オペラント条件づけ、観察学習と社会的学習）	
	第10・11回	記憶（記憶の機能と分類、記憶の忘却と干渉）	
	第12・13回	動機づけと情動（動機づけの分類、フラストレーション、情動の機能）	
	第14回	脳損傷と心のはたらき（失認、健忘、失語）	
	第15回	授業のまとめと試験	
	心理学概論Ⅱ	第1回	オリエンテーション 心の発達（赤ちゃんの発達、愛着の発達）
		第2・3回	心の発達（認知発達と言語獲得、心の理論の発達、発達の障害）
		第4・5回	性格（類型論と特性論による性格の理解、性格の測定）
		第6回	知能（知能の定義、知能の測定）
		第7回	思考（推論、問題解決）
		第8回	社会のなかの人（社会的促進、同調、他者認知）
第9・10回		心と社会（社会的ジレンマ、安心感と信頼）	
第11・12・13回		カウンセリングと心理療法（心の危機、臨床心理学の基礎理論、認知行動療法、クライアント中心療法、臨床心理士の仕事）	
第14回		ストレスとメンタルヘルス（ストレス、ストレスへの対処）	
第15回		授業のまとめと試験	

学部における心理学専門教育の導入に関する一研究（芳賀・川島）

表3 授業前調査「①この授業で何を学びたいか」の回答の分類結果

カテゴリ		実際の回答例
抽象的関心	心について	心とは何か 人間の言動や心理 人の様々な心理の変化 人間関係と心理 心がどこにあるか知りたい 人間の内面について 人間の心理的特性 人の心のメカニズム
	心理学について	心理学のおもしろいところ 基礎から心理学を学びたい 心理学の学問的特徴 心理学とはどういう学問か 心理学の基礎知識を身につけたい 心理学について知らないこと 心理学はどんなときに必要になるか 日常生活で使える心理学の知識
具体的関心 学問的関心	行動	会話中の行動で何がわかるか 行動やしぐさと思考との関係 行動から潜在的な心理を推測すること 行動や言葉に表れる心理
	動物	人間以外にも心は存在するのか 人や動物の心理
	発達・臨床・教育	思春期の年代の人の心理 アスペルガーや多動性障害 他者の心の援助 成長するにつれて変化する考え方 子どもの心理 教育に関する心理学
	無意識	無意識に人が行うこと 無意識の行動の特徴 無意識の影響 夢について
	犯罪	犯罪の背後にある心理的原因 犯人の行動から心理状態を理解する
	感覚・知覚・認知	感覚や感性の個人差 刺激に対する反応を調べた実験 思考のメカニズム 人の思考パターン
仕事や生活に 役立つこと	教員	生徒の気持ちを理解してあげる力 子どもと接するときに必要な知識 教員採用試験に役立つこと 生徒と関わるのに必要な心理学的知識 教員になるために必要なこと 教員になったときに活かせるスキル
	そのほか	お客さんの心理を読み取る方法 認定心理士になりたい カウンセラーに必要なこと 警察官になったときに役立つ知識 将来役に立つようなこと 日常生活で活かせる心理学
人間理解に 役立つこと	他者理解の方法 人間関係の構築	他者の気持ちをくみとる方法 相手の抱える悩みをききだせる力 人の心や感情を読みとる能力 相手の思考を誘導する方法 人間関係をうまくやっていくコツ 人間関係の築きかた
	自己理解 自己実現	自分の気持ちを理解する 自分の心が知りたい 自分自身のことをわかりたい 相談相手になれるような人になりたい 自分の気持ちをコントロールする方法 人間として成長したい
俗信・テレビ・占いなど		心理学の悪いイメージを変えたい 占いの信じさせかた テレビの話題の真偽を確かめる知識 歴史上の人物の人間性を理解したい

学部における心理学専門教育の導入に関する一研究（芳賀・川島）

表4 授業前調査「④「心理学」という言葉から連想するイメージ」の回答の分類結果

カテゴリ		実際の回答例
抽象的関心		うさんくさい 非科学的 難しそう 不思議な学問 おもしろそう 楽しそう 奥が深そう 堅い感じ 曖昧 身近な学問
具体的関心 学問的関心	感覚・知覚・認知	錯覚 錯視 だまし絵
	脳	脳のしくみ 脳波 脳を解明する 心と脳の関係
	研究者	フロイト ユング アドラー心理学
	犯罪心理	犯罪の研究 犯罪心理学 サイコパス
	発達・臨床	思春期 反抗期 鬱病 無意識 夢
その他	人格 性格 暗示 大衆心理 集団心理 うわさ モティベーション 言葉以外のコミュニケーション コミュニケーション能力 感情の変化 行動の予測	
他者の心	他者の心を読む	心を見透かす 読心術 人の心を読む学問 相手の心理がわかる 相手の気持ちを読み取れる 人の考えていることを当てる 人心掌握 嘘を見抜ける 行動や発言から心を読み取る
	他者の心を操る	人の考えを操る 相手の心を洗脳する 人を手玉にとる マインド・コントロール
職業・仕事	カウンセラー	心理士 心理カウンセラー スタールカウンセラー 臨床心理士 カウンセリング 心のケア 心理相談 メンタルケア 絵の描かれている紙を患者に見せている回答ももらったりする 悩んでいる人の話をきく
	精神科医	精神安定剤や睡眠薬を処方する 病院の精神科 学校の相談医 心の病気に携わる
	その他	マジシャン 心理捜査官 プロファイリング 警察の捜査に登場する心理学者 詐欺師 認定心理士
テレビ・俗信・宗教など		オウム真理教 催眠術 占い メンタリズム メンタリスト DaiGo 超能力 ユリ・ゲラー テレビショッピングの口上 恋愛 心理テスト 性格判断 相性診断

学部における心理学専門教育の導入に関する一研究（芳賀・川島）

表 5 授業後調査「④受講後の感想」の回答の分類結果

カテゴリ		実際の回答例
抽象的感想		楽しいものだと思えた 心理学のイメージをつかむことができた 大学の授業という雰囲気が楽しかった 身近で親しみやすい内容だった 知りすぎると怖いなあと思った SFっぽかった
日常生活や社会との関連		身近な生活にも心理学が関係していたことがわかった 日常生活が心理学と深く関わっていることを知った 社会環境の整備にも心理学が関係していることを知った
予想外・驚き	理科系的要素について	高校で習った生物の内容が出てきて面食らった 生物の内容が出てくるとは思わなかった 予想外に理系に近い学問だった 脳科学に近い分野だとわかった 高校の生物で出てきた脳や眼球の仕組みまで授業で触れるとは驚きだった
	俗信的先入観との違いについて	テレビでやっているような心理テストばかりだと思っていたら違った メンタリズムの話だと思っていたが、全く違った 人の心をいじくるようなものかと思っていたが、そうではなかった DaiGoのやっているような内容かと思っていたが脳のはたらきにも触れて おもしろかった メンタリスト DaiGoみたいなやつじゃなかった もっと危ないものかと思っていたが、科学的な内容だった 不思議な内容かと思っていたが、結構現実的だった 心を探られるかと思っていた 相手の心を読み解くだけだと思っていた
	授業難易度について	文系の学問だと思っていたので、数式や計算が出てきて戸惑った 思っていたより難しかった 難しいと思っていたが、身近なイメージが変わった もっと難しい学問だと思っていたが、そうでもなかった
	授業内容について	想像以上に心理学の中身が幅広いことに驚いた 刺激関や刺激頂のことを学ぶとは思わなかった 脳について学び、心理学へのイメージが変わった 錯視図形に脳が簡単にだまされることに驚いた 記憶や学習も心理学のテーマだとは思っていなかった 視覚や聴覚のはなしが出てきたのは意外だった さまざまな記憶の種類があることを知った
そのほかの驚き		意外とおもしろくて興味ももてた 興味ももてない学問だと思っていたが、そうでもなかった 堅苦しいイメージをもっていたが、そうでもなかった 思ったより堅くなくて、おもしろかった
意識の変化		人間に対する見方が変わった 他者への接し方が変わった 今まで自覚してこなかったことに疑問を持つようになった
失望 落胆		臨床心理学の内容を期待していたが、それとは違う心理学だった 自分がイメージしていた心理学〔臨床心理学〕とは違った内容だった 生物学を学んでいるようだった もっと人の心を読む方法について触れてほしかった もっと人の心の深層に踏み込むことを期待していた 相手の心を読み取れるようになるかと思っていた 数学や理科の内容ばかりだった

学部における心理学専門教育の導入に関する一研究（芳賀・川島）

表6 心理学研究部会における目的と具体的な活動例

目 的	対応する具体的な活動例
①心理学を学ぶ学生の学びの深化	<ul style="list-style-type: none"> <li>・講義や実習で取り上げた理論・実験・実践の補足的講義や演習</li> <li>・学生によるQ&amp;A</li> </ul>
②学び得た心理学的知見の日常への応用・実践の機会	<ul style="list-style-type: none"> <li>・講義では実施できない小グループでの演習・ロールプレイなど</li> <li>・講義の内容を発展させる実験や観察など</li> </ul>
③（心理学を通じた）学年横断の交流の機会の創出	<ul style="list-style-type: none"> <li>・複数の学年層が参加する活動での先輩への質問や後輩への指導</li> <li>・研究部会活動の内外で発生する参加者の交流と関係性の構築</li> </ul>

表7 平成27年度（春学期）における心理学研究部会の開催実績と今後の活動計画

日時	内容	主な担当者	参加者（学年・人数）
2015.6.4	オリエンテーション	芳賀・川島	22名（3年：10名、2年：5名、1年：7名）
2015.6.18	傾聴ロールプレイ体験	川島	8名（3年：2名、2年：3名、1年：3名）
2015.6.25	視覚実験	芳賀	7名（3年：2名、2年：4名、1年：1名）
[今後の活動内容]			
	臨床心理学の話題から		<ul style="list-style-type: none"> <li>・傾聴技法</li> <li>・アサーショントレーニング</li> </ul>
	ポジティブ心理学の話題から		<ul style="list-style-type: none"> <li>・ポジティブ感情の役割と機能</li> <li>・レジリエンスプログラム</li> </ul>
	実験心理学の話題から		<ul style="list-style-type: none"> <li>・知覚運動の協応実験</li> </ul>

学部における心理学専門教育の導入に関する一研究 (芳賀・川島)

A Study on the introduction of psychology curriculum  
into undergraduate education

Yasuaki Haga & Kazuaki Kawashima

Abstract

This study reports some problems in the introduction of psychology curriculum into Department of Communication at Kogakkan University in 2014, and introduces some attempts of extra-curricular workshops. The results of survey study of first-year students showed that their impressions of psychology were drastically changed by lectures. Many of the students were surprised to learn about the close relationship between psychology and natural sciences such as biology and brain science. Some of the respondents had difficulty with the math and calculations, and discovered that the content was different from they had expected. In order to address these problems, extra-curricular workshops were introduced in 2015. These aimed to promote the understanding of course contents, to provide the opportunities for practical training in psychological techniques (e.g., experiment, observation, and role playing), and to facilitate communication among students.

Keywords : psychology curriculum, undergraduate education, extra-curricular workshops